

枯れ木に花を！



SF  
短編

やうみ よいち  
八海宵一

## 枯れ木に花を！

---

市庁舎の三階から見える水無川に、夕日が沈んでいく。

計画されていた護岸工事が中断され、中途半端に舗装された両岸がおもちゃのような安っぽい色合いで浮かび上がるのを見、岩佐は嘆息した。

三十年分の嘆息だった。

都市計画再開発部に着任して三十年。とうとう両岸の舗装には至らなかった。プロジェクトチームの一人として、あちこち奔走した岩佐にとって、いまの水無川の光景は屈辱そのものだった。準備に五年。工事に十五年の二十年ですべてが終わるはずだった。それなのにありとあらゆるものが、投げ出された状態でいまでもそこに存在している。

「岩佐部長、そろそろよろしいですか？」

主幹の有馬がノックと同時に顔を見せた。ひょろりとした長身の男で岩佐の後継者になることが決まっている男だった。明日からは代わりにいろいろと動いてくれることだろう。

岩佐は片手をあげて答えると、残りの荷物を段ボールに放りこみ荷造りを終え、有馬に着払いで家へ送っておいてくれと指示をだした。

都市計画再開発部長として最後の指示だった。なんだかしまらないな、と岩佐は内心苦笑した。

部長室を出ると、開発部の職員全員が岩佐を取り囲むように集まってきた。帰らずに待っていたらしい。花束を抱えた女性職員が涙目で「お疲れさまでした」というのを合図に、シャッター音とフラッシュが飛びかい、皆、口々に「お疲れさまでした」「ありがとうございました」といつてきた。

岩佐は熱いものがこみあげてくるのを感じたが、必死にこらえた。こんなところで泣くわけにはいかない。そう思った矢先、有馬がプレゼントを持ってきた。

「開けてみてください」

うながされ、包みを解いてみると中からA4サイズの写真パネルが出てきた。パネルには水無川で指示を出している二十五年前の岩佐がモノクロで写っていた。川のなかに膝までつかり、作業着姿でまっすぐ岸を指さしている姿は、まさに岩佐を象徴するにふさわしかった。

「資料室から見つけてきた画像データを加工させていただきました。記念にぜひ、お受け取りください」

岩佐は短く感謝の言葉をいうと、目頭を押さえうつむいた。

だれかが、「鬼の目にも涙だ」と茶化した。一斉に笑いが起きた。

悪くない定年だ。岩佐はそう思った。

＊

「君も人並みに人望があるんだな」

送別会の直後に岩佐を呼び出した沢木は、珍しいものでも見るような目つきでいった。花束に

記念品を抱えている姿が不思議なものに見えてしかたがないのだろう。

岩佐も負けじと応戦した。

「私の人望なんかどうでもいい。それよりも今日はご自慢のスーツ姿を見せたくて呼びつけたのか？」

ふだんポロシャツとジーンズでフィールドワークにでかける昆虫学者の沢木をわざとからかうと、相手は「ふん」と鼻を鳴らした。

「今日は君に見せたいものがあるって、呼んだんだ」

「見せたいもの？ こんなところでなにを見せようってんだ？」

岩佐が呼びつけられた場所は、水無川の土手だった。開発途中の河川公園が眼前に広がっている。工事が中断しているのと街灯がほとんどないせいで、かなり暗い。これでは見せたいものがあったとしても、よく見えない。

岩佐は沢木の真意がわからず、首をかしげた。すると、暗い闇の中から鋭い声が飛んできた。

「ところで、君はまだ護岸工事を続けるべきだと思っているのか？」

その一言に岩佐は眩暈を覚えた。この三十年、沢木と幾度となく議論してきた話題そのものだったからだ。心地よい酔いがいっぺんに覚め、血圧が上がっていくのがよくわかった。

「言っているだろう、ここの護岸工事は必要なんだ！」

「なぜ？」

冷静な沢木の問いかけとは対照的に、岩佐の口調は激しくなっていく。

「十年に一度起きるかもしれない洪水対策のためだ。工事をしなければ川が増水したとき、大変なことになる。被害が起きてからでは遅いんだ！」

「何度あった？」

「なに？」

「その起きるかもしれない洪水は、この三十年のあいだに何度あったんだ？」

沢木の問いかけにおもわず言葉をのみこんだ。そう、洪水はただの一度もなかったからだ。

「君も知ってるだろう、この川がなぜ水無川と呼ばれているのか。江戸時代から現代にいたるまで、水が枯れることはあっても、洪水が起きたためしはない。知っていてなぜ、工事をするんだ？」

大学で講義をしているような口ぶりに、岩佐は怒りを覚えた。同時に呼び出しに応じてしまった自分自身にも腹が立った。やはり来るべきではなかった。三十年のわだかまりがなくなるのではないか、そう思ったのが間違いだった。

沢木は幼馴染でありながら私を裏切り、護岸工事の反対運動を起し、見事中断させた男だった。

岩佐はこの三十年を思い出し、拳を握りしめた。

定年と同時に和解ができる――そんな淡い期待を持っていた自分が情けなく、腹立たしかった。

岩佐は気持ちを落ち着かせ、いつも通り応戦した。

「それでも工事は必要なんだ。住民のことを考えて出した結論だ」

「君は本当に後悔していないのか？ この川の生態系を破壊し、環境をすっかり変えてしまったことを。工事のせいでカワトンボやスジエビがいなくなり、土手に並ぶ桜の木や、川辺の葦がすっかり枯れてしまったというのに、君はまだなんとも思わないのか？」

沢木の言葉が突き刺さった。彼の言うとおりに、この川はすっかり死んでしまっていた。名所として知られていた桜並木もいまや立ち枯れ、だれも訪れない。夏は盛大な花火大会があったが、長引く工事のせいでいつのまにか開催されなくなった。

後悔がないと言えば、うそになる。

だが、それは工事を中断させた沢木も同罪だ。彼が住民を巻き込み運動を起こすようなことをしなければ、工事は完成し、ここまでひどい状況を生み出すことはなかったはずだ。

「私、一人が悪いわけじゃない」

岩佐は腹の底から、声を絞り出した。

「わかっている。私はべつに君を責めているわけじゃない。もう一度、よく考えてほしいだけだ。この川がどうあるべきなのかを。小さいころ、一緒に遊んだこの川のことを」

「なぜいまそんなことを言う？ 私はもう引退したんだぞ？」

「市長選に出ると聞いた」

岩佐は凍りついた。沢木がどうしてそのことを知っているのか、見当もつかなかった。このことは都市計画再開発部の一部の人間しか知らないはずだ。どこで嗅ぎつけた？

狼狽する岩佐に、沢木は追い打ちをかけた。

「君は市長になって、この護岸工事を再開させるつもりなんじゃないのか？」

凶星だった。岩佐はなにも言わず、ただ沢木を見た。その反応ですべてを理解したのだろう、沢木は長いため息をついた。そして、しばらくしてから枯れた桜並木のほうにむかって「おうい、やってくれ」と叫び出した。

少し離れた桜並木には何人かいるらしく、がたがたと騒がしい音がしはじめた。暗くてよく見えないが、音から推測するに箱か何かを開けているような感じだった。

「なにをやる気だ？」

岩佐は警戒しながらたずねた。まさか、命を奪うなんて話じゃないだろうが……。この三十年の戦いに終止符を打つ。そんな言葉が脳裏をよぎり、岩佐は自然と身構えた。

だが、そんな思いをよそに沢木は淡々としたようすで答えた。

「実験だ」

「実験？」

沢木は小さくうなずいた。

「最後の実験だ。偶然だが、私も今日定年でね」

「？」

話がよくみえない。だったら勝手に実験してくれ。どうして私を呼ぶ必要があるんだ。露骨に怪訝な顔をしていると、沢木がいった。

「君には、どうしても私の最後の実験を見てもらいたくてね。だから呼んだんだ。ほら始まるぞ」

沢木は桜並木のほうを指さした。小さな光の点が浮かんでは消え、浮かんでは消えていた。

「ホタルじゃないか」

「ただのホタルじゃない。プテロプテックス・エフルゲンスだ」

「プテ...プー...なんだって？」

いきなりわけのわからない横文字を聞かされた岩佐は、首をかしげるしかなかった。だが、沢木は気にする風もなく講義を続けた。

「学名、プテロプテックス・エフルゲンスは通常、パプアニューギニアに分布するホタルで、集団発光をするという特徴を持っている」

「それがなんだっていうんだ？」

「桜の枝に特殊な蜜を塗り、一万匹のプテロプテックスを放つとどうなると思う」

「そりゃ、枝に集まって、集団発光するんだろ——おお！」

岩佐は言葉を呑みこみ絶句した。小さな光が徐々にシンクロし、大きな光の明滅へと変わりだしていたからだった。すべての光が桜の枝に集まり、瞬間、満開の桜を思わせる輝きを見せた。それは幻のようにあらわれては消え、あらわれては消えた。

沢木の真意が、やっとわかった。

満開の桜並木を見せて、昔を思い出させ、護岸工事の再開を思いとどませようというのだろう。茶番だ。子供だました。岩佐は内心毒づいた。だが、目からは涙が溢れ出ていた。

幼いころの思い出が、否応なしに甦ってきたからだ。

満開の桜が浮びあがっては消えるたび、岩佐の心は揺れ動いた。まさかこれほどまでに動揺するとは岩佐自身、思いもしなかった。子どもの頃の川釣りや、花見、学生時代の道草.....沢木ともよくこの土手で、いろいろな話をしたものだ。

岩佐は思わず、沢木のほうを見た。

となりにいた沢木はただ黙って、明滅する桜を眺めていた。攻め立てることもなく、慰めることもなく、ただ一言、

「これは私からの餞別だ」

といった。

「馬鹿野郎」

岩佐は立ち去ろうとする沢木にいった。なにが「偶然だが、私も今日定年でね」だ。沢木はこの実験のために退職したに違いなかった。一万匹のホタルを恣意的に使うとなれば、大学側が許すはずなどない。沢木は教授生命をかけてこの実験をしたのだ。

岩佐はもう一度「馬鹿野郎」と叫んだ。

\*

数ヶ月後、市庁舎の三階は騒がしかった。

岩佐の怒声が響き渡っていたからだ。

「だから、水無川護岸工事は全面的に見直しだといってるだろう！」

「いや、しかし……」

有馬は、元上司にして現市長の岩佐になんというべきか言いあぐねていた。市長の隣には、オブザーバーを名乗る元昆虫学教授が澄ました顔で立っている。

有馬は岩佐の抗議に眩暈を覚えながら、それでも粘り強く応戦していた。

「だいたいこの工事計画は、岩佐部長……じゃなく、市長の考えられた素案に基づいているんですよ！ それを全面見直しだなんて、めちゃくちゃですよ！」

「君子は豹変するものだ」

岩佐は平然と答えてみせた。

「豹変しすぎです！」

天を仰いで絶叫する有馬を見、岩佐は苦笑した。

有馬の言うことはもっともだ。だが、水無川をこのままにするわけにはいかなかった。まわりの職員もなにやらひそひそと声を立てているが、そんなものを気にしている暇はない。

岩佐はさらに大きな声でいった。

「いいか、これは市長命令だ！ 必ず水無川を救うんだ！」

あの日見た幻をもう一度、沢木と甦らせてみせる。岩佐はもう決めていた。

今度は、プテロプテックス・エフルゲンスの力を借りずに。

岩佐の決意に迷いはなかった。

## 枯れ木に花を！

<http://p.booklog.jp/book/53092>

著者：八海宵一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yaumiyoiti/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53092>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53092>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ